

役割語史の可能性を探る（2）

—軍記物語における「受身」と「使役」の併用をめぐって—

西田隆政（甲南女子大学）

1 はじめに

日本語研究において、金水（2003）で役割語という研究分野が提起されて以来、10年あまりが経過した。その結果、近代と現代の役割語については、かなりの研究の蓄積がなされてきた。そして、その成果の集成が、金水（2014）に辞典の形で示されている。

一方、役割語の歴史的な研究については、ほとんどなされておらず、関連する研究として、関一雄（2009）の「役柄語」があげられる程度である。稿者は、西田（2015a・2015b・2016刊行予定）で、中古語を中心に、役割語史研究の可能性について、検討してきた。本稿では、それらに続いて、中世語での役割語研究の一端として、軍記物語における「受身」と「使役」の交代するような表現について、検討していくことにする。

2 軍記物語における「受身」と「使役」

以前より、「平家物語」をはじめとする軍記物語では、現代語の感覚では「受身」が使用されるようなところを、「使役」を使用して表現している例が注目されてきた¹。

- (1) 判官は五百餘騎、太田太郎は六十餘騎にてありければ、なかにとりこめ、「あますなもらすな」とて、散々に攻給へば、太田太郎我身手おひ、家子郎等おほくうたせ、馬の腹いさせて引き退く。

（平家物語、巻第12、下 p.391²）

当初、これらは武士の勇猛さを示すものという解釈がなされていたが、研究の進展とともに、その考え方には無理があると指摘され

¹ 研究史については柳田（1994）において整理されている。

² 以下「平家物語」の引用は日本古典文学大系『平家物語』上・下（岩波書店）による。下線は稿者が付した。

るようになった。そして、柳田（1994）が出て以来、それらは、広義の「使役」の用法であり、古代から現代にまで類似の例があることを踏まえて、「そういうことをさせてしまった」という「放任」や「随順」と理解するのが妥当であるというのが、日本語史における有力な考え方となっている。

- (2) 武士詞と言われてきた「馬の腹射させて」は、右の例とは少し違って³、対応する無意志的表現が、単純な無意志動詞ではなく、受身表現である。

馬の腹（が）射られて

馬の腹（を）射させて⁴

しかし、この場合も、無意志的に表現することができるところを、意志的に表現することによって、第三者から見ても、当事者から見ても不可避であったと思われる事態でありながら、なお、なんとかその事態を防ぐことができなかつたものかというくやしい気持ちを表現しているものと見られる。

この種の表現の例は、既に引いたように『土佐日記』に見える。

白散をある者（中略）風に吹きならさせて、海にいれ（元日）

（白散が風に吹きならされて）

この種の表現の直後には、意志動詞の無意志的用法の例（海にいれて）が用いられており、この点からも、右のように解するのがよいことがわかる。ただし、この例は不注意事態表現の例である。

このような表現も、「子どもを死なせた。」のような例と同じく、現代語に生き続けている。

バック陣の不注意で、敵に正面からのシュートを打たせてしまった。 (p.357)

- (2) で柳田（1994）の指摘するように、この「射させて」のような

³ 「死なせた」と「死んだ」との対応を指す。

⁴ 「射られて」とあったのを修正。

表現は、武士の強がりに類することばではなく、しいて言えば、悔しい気持ちを表すものであったと考えられる。そして、このような例は、古代から現代にいたるまで、連綿と使用されており、日本語史上における特定の語法の流れとしてとらえることができると指摘する。

ただ、そのような理解が妥当であったとしても、武士らしいことばづかいという認識がなぜ持たれやすかったのか、という疑問が残る。それは、「射させて」「射られて」と「討たせて」「討たれて」のような対応する例が特定の場面、とりわけ、軍記物語でのもっとも重要な場面、戦場において多用されていることが、その一因と考えられる。

3 一の谷合戦場面での例

山内（1977）⁵は、戦場において、「受身」と「使役」が、交代するかのように使用される例に注目している。その代表例として、「平家物語」巻第9、一の谷の合戦を描写する「二度之懸」をあげる。

(3) 河原次郎泪をはら／＼とながいて「口惜い事ものたまふ物かな。

たゝ兄弟二人あるものが、兄をうたせておとゝ一人のこりとどま（ッ）たらば、いく程の榮花をかたもつべき。所々でうたれんよりも、ひとところどこそいかにもならめ」 (p.206)

(4) 其時下人共、「河原殿おとゝい只今城のうちへま（ッ）さきかけてうたれ給ひぬるぞや」とよばゝりければ、梶原是をきゝ、「私の黨の殿腹の不覚でこそ、河原兄弟をばうたせたれ。今はときよく成りぬ。よせよや」 (p.207)

(5) 「いかに源太は、郎等共」ととひければ、「ふか入りしてうたれさせ給て候ござ（ッ）めれ」と申。梶原平三これをきゝ、「世にあらむと思ふも子共がため、源太うたせて命いきても何にかせん、かへせや」とて、と（ッ）てかへす。 (p.208)

「二度之懸」には、(3) (4) (5) に挙げたように、3例「受身」の「うたれ」と「使役」の「うたせ」が連続して使用されている。(3)

⁵ 引用は山内（1989）による。

では、河原次郎の会話文、(4) では下人と梶原平三の会話文、(5) では郎等と梶原平三の会話文、「うたせ」と「うたれ」が対応するかのよう使用されている。

これらについて、山内(1977)では、(5)の源太の「うたれて」と「うたせて」について、(6)のように述べる。さらに、(7)の引用部分でこのような用法の特徴をまとめている。

(6) 前者は源太の戦死を事実として受け止め、すなおに表現している。後者は源太の戦死を防げなかった父親の痛恨を伝えている。ここに開き直った心の屈折のあることは否定できないけれども、それはやはり副次的な感じであろう。(p.157)

(7) 要するに、問題の用法は、ある主体が、その身体の一部(これに準ずる馬など)や、責任のある、或いはそれを共有する身近な人について、被害を受け、或いは受けようとするを、客観的ではなく自分との関連で強く意識するとき用いられると言えようか。構文は限られ、意味には幅がある。(p.160)

山内(1977)が指摘するように、「受身」と「使役」には、話し手の事態の捉え方という点で、何らかの使い分けがあったと考えるべきであろう。次章では、それを現代語の例と対比して検討する。

4 現代語における「受身」と「使役」の交代可能な例

現代語において、「受身」と「使役」が交代するかのよう使用される例は、とりわけ、サッカーやバスケットボールのような、両チームでボールを奪い合って試合をする球技に見ることができる。

(8) シュートを打たせない浦和の鉄壁守備

◇ J 1 第 1 S 第 16 節 神戸 1-1 浦和 (20 日・ノエビアスタジアム)

データで見ると、浦和のVの要因の一つに鉄壁の守備がある。被シュート数(1試合平均)は18チーム中最も少ない。堅守が相手にシュートを打たせず、強さにつながった。

浦和が 16 試合で打たれたシュートの数は 130 本。

(スポーツ報知サイト 2015 年 6 月 30 日記事)

(8) は、スポーツ紙のサイト記事である。この中では、浦和（レッズ）が優勝したのは鉄壁の守備だったからであるとして、「シュートを打たせず」とする一方で、「打たれたシュート」という言い方もしている。これは、自分たちの守備力で「打たせなかった」というのと、単にシュートを「打たれた」数という事実を指摘するというのとでの使い分けが考えられる。

また、「受身」と「使役」の対応の例は、「打つ」以外の動詞にも見ることができる。

(9) 「シンガポール戦で露呈された日本の弱点。このままでは最終予戦でやられる」

無失点に抑えたとはいえ、後半、サイドからクロスを上げられた時に、危ないシーンが何度もあった。(中略)

完勝に近いゲームでも、後半にああいう場面を作られていること自体、どうかと思う。きれいにクロスを上げさせているし、中の対応もルーズで簡単にスペースを突かれている。

(岩本輝雄のオタクも納得！ 2015 年 11 月 30 日)

(9) では、他動詞「上げる」に「使役」と「受身」の例がある。試合の進行説明ではクロスを「上げられた」と「受身」を使用し、日本チームの立場からミス等で相手チームにクロスを「上げさせている」と「使役」を使用する。

(9) の例のように、「打つ」以外にも、サッカーの試合に関わる動詞にも、「受身」と「使役」との対応の例を見ることができる。このことからすると、サッカーの試合においては、相手のチームにやられた事実を説明する場合には「受身」を使用し、自分たちのチームのミス等で責任のある場合には「使役」を使用するという、使い分けがなされていると考えられる。

日常会話において、「使役」は、「弟に布団を上げさせよう」のように、自分が意図的に相手に依頼等をして、作業をさせるときに使

用することが多い。しかし、(8) や (9) の「打たせる」や「上げさせる」のように、自分のミス等が原因の状況について、「使役」を使用することは想定しにくい⁶。やはり、これらはサッカー等の試合において、使用されやすい、ことばづかいとすべきであろう。

そして、「打たせる」など「使役」を実際に試合に関わる選手やコーチが「会話文」で使用すると、それは、役割語の可能性のあるものになると考えられる。

(10) 「2度のミスに奮起。広島の逆転劇を生んだ森崎和幸の「頭脳プレー」」

その今野をマークしていたのが、森崎和であった。

「2失点目は、コンちゃん（今野）が微妙なポジションを取っていて、自分のマークだったのに、シュートを打たせてしまった。1失点目といい、2失点目といい、チームメイトに迷惑をかけてしまった。どこかでそのミスを取り返したいという気持ちはありました」

(web スポルティーパー 2015年12月4日)

(11) 「バスケットボール部 桐蔭横浜大に敗れ3連敗／関東大学女子2部リーグ」

試合後のコメント 平田ヘッドコーチ

「ディフェンスでプレッシャーをかけられなくて、フリーでシュートを打たせてしまって完全に乘せてしまった。そこから立て直しは少しできたが、それが続かなかった。(以下略)」

(MEIJI UNIV SUPPORTS WEB 2015年9月15日の試合の記事)

(10) では、広島（サンフレッチェ）の森崎和幸選手が、自分のマークが弱いばかりに得点を許してチームメイトに迷惑をかけたので、それを取り返したいと試合中考えていたとある。(11) では、明治大学の女子バスケットボール部が試合に敗れた際、ヘッドコーチが「フリーでシュートを打たせてしまって」と反省の弁を述べる。

⁶ 柳田(1994)でも取り上げられた、「(自分の過ちで)愛児を死なせた」(p.351)のような例はあるが、やはり日常的なものではない。

(10) (11) とともに、自分たちがミスをした結果、的確な試合運びができなかったので、相手に「シュートを打たせてしまい」、試合を不利にしてしまったとする。試合に出場する選手や、選手に指示を出す当事者であるコーチだけに、責任感を強く感じて発言する会話文となっている。サッカーやバスケットボール等のチーム競技では、一人のミスが失点や敗戦につながるだけに、このような「使役」が会話文に使用されるものと考えられる。

この現代語のスポーツでの例については、すでに柳田（1994）から引用した（2）で、サッカーでは「使役」の例が見られそうなことは示唆されているところである。

それでは、なぜ、ボールを奪い合って試合をする球技においては、軍記物語と同様の「受身」と「使役」の交代する例が見られるのであろうか。

これらの例も、軍記物語と類似の使い分けがなされていると想定される。「受身」では、普通に「シュートを打たれる」のように事実として受け止めている。一方、「使役」では、自分の側のミスや悔しい気持ちも含めて「シュートを打たせた」のような言い方をしている。あるいは、ゲーム戦略としてそれを避けるように工夫すると（8）のような「シュートを打たせない」チームが完成する。

要するに、武士の戦う戦場も、選手が試合をするフィールドやコートも、ともに自らの責任を負うような状況、あるいは、直接的な責任のない状況が併存して、戦闘や試合が進行していくゆえに、このような表現が併用されていると考えることができる。戦闘と試合の類似性が、表現の共通性につながっていると言えよう。

そして、軍記物語の地の文での説明や、サッカー等での解説的な説明であれば、それは、ある種の戦闘の描写や試合の説明の用語と理解することができる。しかし、それらが、登場人物である武士の会話や、あるいは、試合に出場した選手の談話において使用された場合、ある種のそのような武士や選手にとって、ふさわしいことばづかいになっていると考えられる。

とすると、これらの例には、役割語の可能性が あることになる。金水（2015）によれば、役割語は、特定のことばづかいが特定の人物像に結びつくことが、作品の享受者において共通理解となってい

るときに、成立すると考えられる。「矢を射させる」や「シュートを打たせる」等を、会話に使用する人物は、いかにも武士や選手らしいことばづかいをしていることになる。また、逆に、このような会話文から特定の人物像が想起されることにもなる。

ただし、現状での日本語話者の意識を考えると、サッカー選手等が「シュートを打たせてしまった」のような「使役」を会話文で使用する事自体は、当然ありうることではあるものの、いかにもサッカーの選手らしいことばづかいと意識されるまでには至っていないようである。金水（2015）の「作品の享受者の共通理解となっている」という点からすると、サッカーファンの間でそこまでの共通理解があるとは言えない。現状では、役割語に準ずるものというのが妥当な位置づけであろう。

そして、軍記物語の「使役」の例を現代語のスポーツ例と比較すると、軍記物語には意図的に武士が使うという意識があるように見受けられる。それは、一連の戦場の文脈の中で使用されている点からもうかがわれる。さらには、武士らしい強がりの表現とするような理解がなされた点も、それを補強するものとなる。現代語でのサッカー等との例との比較から、武士の使用する「使役」のことばづかいは、作品の享受者にも共通理解のある、役割語の可能性の高いものとして考えられるのである⁷。

5 おわりに

役割語史の研究は、まだ手つかずの状態であり、さまざまな人物のことばについて、個別的な指摘が散見される程度の進展段階である。もちろん、それらは、貴重な先駆となる研究であるが、いずれもが、役割語といういかにも人物らしいことばが造形されたという視点ではなく、当時のそれぞれの階層の人物がそれに相応しいことばづかいをしていたとする、位相の面からの指摘となっている。

今後は、それらを、現実世界（リアル）のことばづかいを直接的に反映したものとしてではなく、あくまでもフィクションなどの仮想世界（ヴァーチャル）のことばづかいとして、造形された可能性

⁷ ただし、軍記物語の「使役」の例は、あくまでもフィクションの作品内でのものである。実際の武士のことばづかいがどうであったかという点は、また、別途考察する必要がある。

を踏まえて、検討していく必要がある。

〔参考文献〕

- 金水敏 2003『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 金水敏編 2007『役割語研究の地平』くろしお出版
- 金水敏 2008「役割語と日本語史」（金水敏・乾善彦・渋谷勝己編『シリーズ日本語史 4 日本語史のインターフェイス』第7章、岩波書店）
- 金水敏 2011a「言語資源論から平安時代語を捉えるー平安時代「言文一致」論再考ー」『訓点語と訓点資料』127 訓点語学会
- 金水敏編 2011b『役割語研究の展開』くろしお出版
- 金水敏編 2014a『〈役割語〉小辞典』研究社
- 金水敏 2014b「フィクションの話しことばについて 役割語を中心に」（石黒圭・橋本行洋編『話し言葉と書き言葉の接点』I 共時的研究・1、ひつじ書房）
- 金水敏 2014c『これも日本語アルカ？ 異人のことばが生まれるとき』岩波書店
- 金水敏 2015「キャラクター言語から役割語へ」役割語・キャラクター言語研究ワークショップ（2015年2月17日於大阪大学）
- 定延利之 2011『日本語社会のぞきキャラくり 顔つき・カラダつき・ことばつき』三省堂
- 関一雄 2009『平安時代の動画的表現と役柄語』笠間書院
- 高山倫明 2007「訓読語と博士語」九州大学大学院人文科学研究院（文学部）平成19年度社会連携セミナー①言語と文芸ー和漢古典の世界 第1回（2007年7月28日於福岡市文学館）
- 築島裕 1963『平安時代の漢文訓読語に就きての研究』東京大学出版会
- 柳田征司 1994「意志動詞の無意志的用法ーあわせて使役表現のいわゆる許容・放任・随順用法について」（佐藤喜代治編『国語論究第5集 中世語の研究』明治書院）
- 山内洋一郎 1977「軍記における受身表現と使役表現と」『奈良教育大学国文』1 奈良教育大学（山内 1989『中世語論考』II 語法・3、清文堂出版）
- 西田隆政 2009「ツンデレ表現の待遇性ー接続助詞カラによる「言いさし」表現を中心にー」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』45
- 西田隆政 2010「「属性表現」をめぐってーツンデレ表現と役割語の相違点を

- 中心にー」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』46
- 西田隆政 2011b 「役割語としてのツンデレ表現ー「常用性」の有無に着目してー」(金水編 2011b 第14章)
- 西田隆政 2012b 「「ボク少女」の言語表現ー常用性のある「属性表現」と役割語の接点ー」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』48
- 西田隆政 2014a 「平安和文の会話文の「文体」をめぐって」『文学史研究』54 大阪市立大学国語国文学会
- 西田隆政 2014b 「メディアとしての平安和文」『国語語彙史の研究 33』和泉書院 国語語彙史研究会
- 西田隆政 2015 「役割語史の可能性を探る(1)ー平安時代における年長者の男性の会話文をめぐってー」『甲南国文』62 甲南女子大学国語国文学会
- 西田隆政 2016 (刊行予定) 「役割語史研究の可能性」

[参考サイト]

「【岩本輝雄のオタクも納得!】シンガポール戦で露呈された日本の弱点。このままでは最終予選でやられる」

<https://www.legendstadium.com/news/japan/14288/>

「スポーツ報知 シュートを打たせない浦和の鉄壁守備」

<http://www.hochi.co.jp/soccer/national/20150620-HT1T50283.html>

「web スポルティーパー 二度のミスに奮起。広島逆転劇を生んだ森崎和幸の「頭脳プレー」」

<http://news.livedoor.com/article/detail/10912752/>

「MEIJI UNIV SPORTS WEB バスケットボール部 桐蔭横浜大に敗れ3連敗/関東大学女子2部リーグ戦」

http://www.meispo.net/news.php?news_id=8810

(いずれも2016年2月16日に最終確認)

[付記] 本稿は、2015年12月6日、神戸センタープラザ西館会議室で開催された文法史研究会で発表した、「役割語史の可能性を探る(2)ー軍記物語における「受身」と「使役」の併用をめぐってー」を加筆、修正して、成稿したものである。席上、ご意見いただいた方々に、あつく御礼申し上げます。